

不思議な生還

新潟県 鈴木 八郎

新潟県東蒲原郡の中心地、津川町の古い家に生まれ、町内の県立農林学校を卒業後、就職と実家の手伝い、老いた両親の世話をしながら十八年の徴兵に至る。近衛兵の父親は日清戦争に従軍し、北白川宮殿下が台湾転戦時に、東京相撲取り四人での青竹のおかごにお乗りになられ行軍された、そのお側にお勤めた由。また、日露戦争時には鴨緑江の敵前上陸に船を操って奮戦したとのこと。奉天戦には、幹部の大半が戦死されたのに不思議と弾が当たらずに無事除隊できた由。不肖自分も、衛生兵として直接満州孫呉第一陸軍病院に現地入隊するに至った。

教育期間は嫩江で一期受け、その後孫呉にて医学教育と実務教育を本院で受けた。本業は外科勤務である。日野軍医大尉殿の実務教育受ける。夜間の盲腸手術が

多かった。たびたび部隊長殿の手術立会いがあった。部隊長殿は中支の錦州からこられた方で、軍医大佐宮宅惣八郎殿である。生家は九州で、西郷隆盛と瓜二つでした。

外科の日野大尉殿は終戦後ハバロフスクの病院で勤務されておりました。生家は東京の日野病院であります。自分も教育されたおかげで、門前の小僧で医師のまね事ができるようになった。外科勤務で多忙な毎日でした。先輩の原隊長より部隊長当番をするように言われ、福井准尉殿に副命に参り勤務に就くことになった。当時、孫呉地区より動員令出動で部隊編成し、たびたび南方へ出発して行った。

二十五年五月ころ、宮内班長より急な呼び出しのこと、陸軍歩兵曹長の兄が中支において部隊指揮中、十倍の敵との戦闘で戦死したことを知らされた。誠に残念だった。関東軍だけでなく中国地区も手薄の状況下にあった。元孫呉外科の原兵長もフィリピン方面で戦死された由。自分も後日シベリアから復員後、津川町役場兵事係よりセレベス島方面で戦死の報告があっ

たと知らされたと。悪運が強かったのだと感じた。

八月九日、ソ連機がはるか上空でヒバリのごとく舞っていたが、だんだん下へ降りてきた。敵無しと見、機銃掃射を始めた。三八歩兵銃では話にならない、応戦は意味無しであった。八月十一日、持てるだけの薬剤と器具を持って荒神山の陣地に登った。動力発電機の力では心細い限り、ソ連機の爆撃開始で軍馬が谷へ飛ばされていた。関東軍の戦力は無いも同然、今大戦は最初から最後まで狂っていたわけである。

八月十五日、山の広場に集合するようにとの命令で、集まった所でラジオ放送があったが、ガーガーの音ばかりで内容不明。終戦の玉音放送との説明であった。いよいよ荒神山の陣地から下ることになった。病院も兵舎も焼却済みで芋穴住まいとなる。病院の軽作業後小休止で横隊で休んでいた所へ、目の前をバツと風の通る音がしたとたん、隣の元開拓団の老兵がぱたと倒れこんだ。何事かと抱き起こしたが頭部貫銃創で、脈を診たが二、三分でこと切れてしまった。自分の目の前三十七センチを走った弾で、紙一重で自分は助かつ

た。実情は若いソ連兵が百メートル先での不法発砲であった。家族のおられる大事な方であって、残念な事件であった。

二カ月ほど過ぎて、患者同道でソ連領内へと出発することになった。黒河に向かう途中なかなか進まず、野戦食作りも材料が少なく苦労する。途中瓊瑋付近でソ連の重戦車がさかさになって焼けているのに遭った。相当な激戦であったことがうかがえる。黒河によりやく着く。寒さ厳しくなる。十二月早々に黒龍江（アムール川）を徒歩で渡ることになった。

病人を連れての行軍で、時間をかけてプラグエシチエンスクに到着した。大きなドームである。設備は何もなく、毎日栄養状態は悪くなる一方で、患者はほとんど多く入ってくるので五百人くらいになった。炊事場へ行ってみると、婦人二人で大釜で大根干しだけを煮ていた。あとは何もない。しょうがなくて塩の味付けとサラダ油を入れるよう依頼し、黒パンを要求して時間をかけて受け取り、形だけの配分ができた。ソ連も大戦後で、さらに不作の年で食糧は配給も少ない様

子である。少量の食事で栄養どころでなく、薬剤も器具も満足になく、手術ができれば治せる患者も傷口はウジに任せるのみ、患者はただ見殺しの状態である。

死亡者の名簿は取り上げられた。

地方人の方も含む関東軍の勇士の屍は、ただただ凍土の中に眠ってもらうのみの状態であった。

ようやく貨車で奥地への移動が始まる。途中徒歩での移動もたびたびである。患者の中には、元は体格がよかったと思われる人が痩せ細り、歩くのがやっとで、戦友の話では日露戦争当時の司令官の孫に当たる人とかが途中ついに亡くなられた。痛恨の極みなり、死の行軍地獄のような行程であった。

バイカル湖の手前ウランウデの街の近くに到着した。監視塔付きの収容所、第三〇保育大隊に到着した。檻の中の人間として「悪夢の中の屈辱の生活」が始まる。保育大隊とは名ばかりで、零下三〇度、五〇度の中、薬剤もなく設備もなく、松林伐採で生木の燃料を作りストーブで暖をとり、毎日患者の世話と遺体を処理し葬るのが日課であった。土地の人の話では、この山の

墓地にノモンハン事件の俘虜が葬られていたとのことである。

厳寒が過ぎて春が近づくにつれて空気が乾燥し、ほこりが舞い気温の変化が激しくなりはじめたころ、ラーゲルでは肺炎患者が出始めた。栄養不足の上に肺炎ではすぐに死亡につながる。しかしできるだけのことはせねばならない。夜中に水を割り頭を冷やし、また湯を沸かして湯タンポで元氣をつけてやる。夜間作業中、熱湯で火傷もした。今でも足首に跡が残っている。自分も熱病で、黄痘と四〇度の熱で倒れた。運よく帰れたのが不思議なくらいである。

薬剤も栄養剤もなく、栄養失調患者に適した食糧もなく、ただただ死を待つ毎日である。食塩水を作って静脈注射するにも骨と皮ばかりの体で、肉のない体では受け止めない。空転のみで、生命が保てるわけがない。親の名、子供の名を呼びながら絶命していくのをただ見守るのみの状態であった。無理に蒸し風呂に連れてゆけば、中には、ばったり倒れたまま、こと切れている状態であった。夜の不寝番にソ連の年取った下

士官との世話ばなしの中で、ソ連では一般の人たちが五、六人以上集まった席で自由な話はできない、だれがゲーバウー（特別警察）であるか不明ゆえなり、労働時間にはただ与えられたノルマを消化するだけで、自由が束縛されているとこぼしていた。

二十一年の夏ごろよりよく生活面も落ち着いてきた。熱滅菌でシラミもなくなり、軍医さんも薬剤の面で大分楽になった。冬期間に同じ職場の衛生兵が風土病の熱病にかかり亡くなられたことが思い出される。誠に残念なことでした。自分がなけなしのビタカンフルの注射をしながら脈をとり、最期を看取ったことが悪夢のように思い出される。当時は敗戦のどさくさで、最悪の状況の中の作業で、日常の業務に追われる毎日であった。苦しい生活にもようやくなれ、作業日程も安定してきた。病室内の患者も平均して病状が平靜になってきた。保育大隊も体力が付いて、缶詰工場へのラポーターに通勤できる者が多くなってきた。一時は衛生兵も駆り出されてラポーターに出たこともあった。

二十二年七月、保育患者とともにダモイの帰還命令が出て、いよいよ夢にも見た故国へと出発することになった。幾たびか死線を越えての帰還で、ナホトカ港より迎えの永祿丸に乗船した。日本海を渡り舞鶴港に入ったときの海の青さ、八月六日、平引揚げ桟橋に上陸したときの感激は一生忘れることができない。余りにも多い綱渡りの不思議な生還であった。一歩間違えば銃弾で倒れており、また熱病で倒れてこの世になく、またフィリピンのセレベス島で船とともに戦死していたわけである。不思議な生還であった。

追憶の瓊瑋・ブラゴエ

福井県 林 俊男

① 敗戦も色濃い昭和十九年十月二十日、中部第三六部隊に現役入隊し、十月二十五日早朝、防寒被服を支給され部隊を出発である。雑のう、水筒（竹筒）、地下足袋という情けない姿で京都の東本願寺に集結。京都、